

日本新聞製作技術懇話会
広報委員会編集

編集人 桑江 暢也
東京都千代田区内幸町
日本プレスセンタービル
8階 (〒100-0011)
電話 (03) 3503-3829
FAX (03) 3503-3828
<http://www.conpt.jp>

CONPT

CONFERENCE FOR NEWSPAPER
PRODUCTION TECHNIQUE JAPAN

VOL.41 No.2
2017.3.1
(通巻 242 号)

日本新聞製作技術懇話会
会 報 (隔月刊)
(禁転載)



目次

バリアフリー・ユニバーサルデザイン推進功労者表彰 総理大臣表彰を受賞して

	静岡新聞社 総務局局次長	齋藤 哲史	3
page2017 視察記	(有)メディアテクノス 代表取締役	井上 秋男	4
楽事万歳	中日新聞北陸本社 技術局次長兼制作部長	石田 悦郎	8
	富士薬品工業(株) 取締役社長	名取 茂	9
わが職場あれこれ	(株)高知新聞総合印刷 新聞印刷本部長兼印刷部長	山崎 昌彦	10
	(株)トッパンメディアプリンテック関西 統括部長補佐	水黒 順二	10
新入会のことば	(株)システマック 代表取締役	風間 大介	11
第42回年末全体会議開く			11
第35回新聞製作人新年合同名刺交換会開く			12
お知らせ			12

- 表紙写真提供：中日新聞印刷(株)・加藤 泰一氏「ビッグベン」
- 表紙製版：(株)デイリースポーツプレスセンター
- 組版・印刷：(株)デイリースポーツプレスセンター

<お知らせ>

CONPT-TOUR2017 10月に実施

・WPEとDCX Digital Content Expo

日本新聞製作技術懇話会(CONPT-JAPAN)は一般社団法人 日本新聞協会の協賛を得て、10月にベルリンで開かれるIFRA World Publishing Expo (WPE) とDCX Digital Content Expoの視察を中心とした欧州新聞製作事情視察ツアーを実施します。

WPEはこれまで毎年単独で開催されてきましたが、今年の大きな特色はDCX Digital Content Expo とのジョイント開催となることです。メッセ・ベルリンを会場に10月10日(火)～12日(木)

・欧州新聞社のデジタル最先端も視察

の3日間開かれます。

視察団は展示会に加え、欧州の新聞社におけるデジタル部門の最先端事例を視察できるよう見学先の調整を進めてまいります。視察期間はWPE開催期間を含めた10月上・中旬の7～8日間を予定しています。

両展示会の詳細などその都度小誌に掲載します。また、視察団派遣のご案内は7月ごろにお届けいたします。

(日本新聞製作技術懇話会)

バリアフリー・ユニバーサルデザイン推進功労者表彰 総理大臣表彰を受賞して ～UDを決意した2つの事実～

28年度

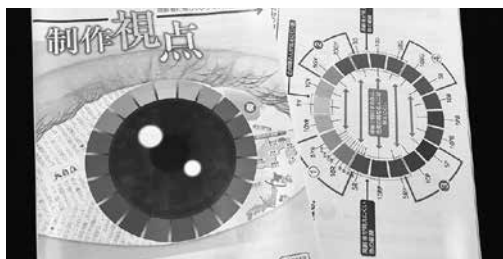
静岡新聞社 総務局局長 齋藤 哲史

静岡新聞・静岡放送のメディア・ユニバーサルデザインプロジェクトチームが2016年12月20日、内閣府の平成28年度バリアフリー・ユニバーサルデザイン推進功労者表彰で内閣総理大臣表彰を受けました。関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

2013年の夏、静岡新聞社と取引のあるインキ会社の営業担当者の一言に衝撃を受けました。「色弱者(以下、色覚タイプの異なる人)は赤と緑が隣り合った場合、両方とも茶色系に、ピンクと水色は両方とも灰色系に見えるようです」。赤と緑はクリスマスカラー、ピンクと水色はコーディネートで普遍的な配色。制作者はこういった配色を好む傾向にあり、新聞のグラフや表、テレビ画面などで何度となく目にしてきました。

しかし、良かれと思って作ったものが伝わらないのは本末転倒です。色覚タイプの異なる人は男性で20人に1人といわれ(女性は500人に1人)、血液型のAB型と同程度の割合です。見過ごすことはできません。社内周知を図るため、ガイドブックの制作を決め、プロジェクトチームを編成しました。ガイドブック制作にあたり、メディア・ユニバーサル・デザイン協会(以下、MUD協会)に監修をお願いしました。MUD協会の伊藤会長からは、色のUD対象者は色覚タイプの異なる人とその10倍は存在する高齢者だと言われました。高齢者は想定外でした。しかも、高齢者と色覚タイプの異なる人の見分けにくい色は違うといいます。色覚タイプの異なる人のみをターゲットに考えていた我々は困惑しました。しかし、MUD協会には両者が共通して理解

できる配色のノウハウがあり、ガイドブックの最終頁(写真)には、その配色ガイドを色相環で示すことができました。弊社にとって、かけがえのない宝物になりました。また、過去数年の新聞、放送で出した「問題がありそうなデータ」を検証し、具体的に悪かった点やその改善例も示しました。問題があった表現は色だけでなく、線の太さや形にまで及び、それらが色と絡み合い、構成されている場合もありました。新聞、放送のこうした実例がガイドブックの後半には盛り込まれています。



私が最初に新聞UDフォントを見たのはMUD協会の夕暮れせまる応接室でした。慣れたはずの新聞フォントと新聞UDフォントを見比べました。新聞フォントは文字が読みにくく、紙面がぼやけて見える感じがします。一方、新聞UDフォントは一文字、一文字が読みやすく、文字列がはっきり見えます。目が慣れてきたせいかと思い、通常の新新聞フォントに目を移すと、やはり、記事全体がぼんやりしています。再度、新聞UDフォント紙面に視線を戻すとくっきり見えるのです。目から鱗でした。この瞬間、新聞UDフォントを導入すべきと確信しました。年齢に伴い眼球の機能は衰え、高齢者は暗い光源下で明朝体の細い横線部分を認識しにくくなりま

す。新聞UDフォントは明朝体の横線を通常よりも太くするなど、高齢者などに読みやすくしたフォントです。私は2つの新聞を明るいオフィスではなく、一般家庭レベルの光源下で見比べたため、新聞UDフォントの機能が理解できたのだと思います。静岡新聞社は2015年9月14日の夕刊からイワタ新聞UDフォントを導入しました。この導入は新聞が読みにくくなった高齢者に限らず、全ての読者

に寄り添うための施策です。ご高齢の読者からは読みやすくなったというお便りもいただきました。

この2つの事実は「人に伝える」というメディアの仕事を見つめ直す、いい機会になりました。UDにゴールはありません。情報を受ける全ての対象者に思いを馳せ、優しく、深い表現を模索し続けることが我々メディアの使命であると考えています。

page2017視察記 「デジタルファースト時代」の印刷メディア紹介

有限会社メディアテクノス 代表取締役 井上秋男(JAGAT客員研究員)

印刷メディアビジネスの総合イベント「page2017」は、1988年の初開催から30回の節目を迎え、新聞界からも多数来場し盛会となった。わが国メディアの「デジタルファースト」が進む中、page展ではカンファレンス、セミナー、展示会ともIoTを積極活用した新ソリューションや新ビジネス展開が相次いで紹介され、30回記念にふさわしい有意義な展示会となった。

以下、視察記として「開催概要」「見えてきたもの」「分野別出展動向」をレポートしたい。

■開催概要

公益社団法人日本印刷技術協会(JAGAT)主催の「第30回page2017」は「ビジネスを創る～市場の創出～」をテーマに、2月8日～10日の3日間、東京・池袋のサンシャイン・コンベンションセンターで開かれた。▼**基調講演**は毎日午前中開かれ、初日は北米最新マーケティング論について学び(ホップ)、二日目はマーケティング理論をどのように実務に生かせるかを考え(ステップ)、三日目は実際に実行している事例を取り上げることで、実現に向けての問題点やメリットを学ぶ(ジャンプ)展開により好評となった。特に初日の「ザ・マーケティング」は、アメリカからマーケテ



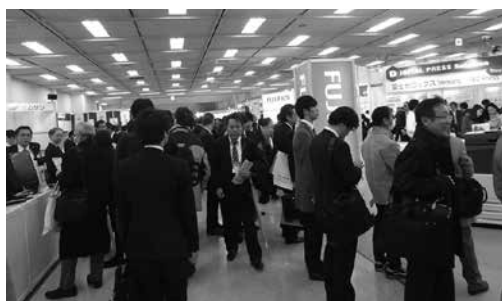
盛会のカンファレンス

ィングの第一人者Ron Jacobs氏を招き、講演と活発な議論を通じてこれからの印刷ビジネスの方向性をマーケティング視点から考察した。▼**カンファレンス**は、今後の印刷メディア業界を展望する「グラフィック」「クロスメディア」「印刷マーケット」の3つのカテゴリーで計14セッション実施され、経営幹部も多数出席した。「クロスメディア」には新聞・通信関係者も参加し、「価値を生み出す“データ×メディア”」と「コンテンツの“質と売り方”」をテーマに、2日間にわたり最近の取り組みと今後の展開などを議論した。▼**セミナー**は、現状のさまざまな課題解決のヒントや、すぐに役立つスキルを身につけることを目的に、メインテーマの「ビジネスを創る」を強く意識して「新市場創出」「営業・企画力強化」

「DTP・プリプレス」「印刷技術・管理」で計16セッション実施した。▼**展示会**は、文化会館B、C、Dの3ホールを使用し、出展社159社(前回145社)、出展小間数539小間(同510小間)、来場者は7万1910人(同7万370人)といずれも前回は上回る盛況となった。新たな試みとして「印刷パートナーゾーン」を展示ホールBに新設し、来場者とのビジネスマッチングやコラボレーションの場として活用された。

また、特別企画として展示ホールBに全国の印刷会社発行の「フリーペーパー」を一堂に集め、新たなビジネス展開を紹介し注目された。

なお、今回は2018年2月7日～9日まで同所で開催される。



賑わう展示会場

(注)ベンダーの略号は次の通り 富士フイルム グローバルグラフィックシステムズ=FFGS、キヤノンマーケティングジャパン=キヤノン、コニカミノルタジャパン=コニカミノルタ、リコージャパン=リコー、メディアテクノロジージャパン=メディアテクノロジー、日本アグファ・ゲバルト=日本アグファ

■見えてきたもの

▼**デジタルファースト時代は「VSからWITHへ」**：わが国ではスマホやSNSの普及拡大により、メディアは「デジタルファースト」に向け進化発展し、ペーパーメディアにも多大な影響を及ぼしている。このため、page2017では従来の「ペーパーVSデジタル」による競合ではなく、「ペーパーWITHデジタル」+「データドリブン+ワークフロー連携」により協業して、メインテーマの「ビジネスを創る～市場の創出」を実現するカンファ

レンスや出展が相次ぎ注目を集めた。▼**ワークフローのハイブリッド化・多様化進展**：従来の「ペーパー/デジタル専用ワークフロー」から両者のメリットを活かすため「ハイブリッドワークフロー」の出展が増加した。また、MISとの連携により業務の効率化と多様なソリューションを実現する最新ワークフローも提案された。さらに業界全体として印刷会社、オフセット・デジタル印刷機ベンダーが連携するコンソーシアムの設立も見られた。ハイブリッド展開はワークフローだけではなく「フォント、用紙、アプリソフト、マーケティングオートメーション」分野にも波及している。

▼**デジタル印刷はパッケージなど新分野へ**：前回のデジタル印刷は商業印刷やパッケージ印刷向けソリューションが多く見られた。今回は「シール、ラベル、紙器印刷」などが出展され、新分野への取り組みが活発化している。また、「ニス引き、加飾加工」などの新たなソリューションも実演された。▼**環境対応と働き方改革の両立**：主要ベンダーから「無処理CTPによる省資源ソリューション」「Web入稿・校正、プロファイルの自動作成による省力化」「システム・機器の操作運用や保守の容易化」「新ワークフローによる印刷工程の効率化+自動化」などの環境対応と印刷現場改革の両立が提案され注目を集めた。▼**連携、コンソーシアム進展**：顧客対応や新たな市場開拓とコスト削減を実現するベンダー間のワークフロー連携と営業部門の改革を支援する新コンソーシアムの立ち上げなどが紹介され、「ユーザーファースト」への進展が見られた。

■分野別出展動向

①編集制作・フォント

▼**富士通**：Web入稿による多品種・大量の画像データを処理する高品質・省力化ソリューションを紹介。おもにカラー印刷の色合

いを変化させることなく、使用インキの最適化や環境負荷の低減・コスト削減を実現し、またインキ乾燥時間の短縮や印刷機の汚れ低減などによって作業コストを低減させる新ソフト「D-GAMME」(「InkFit」の後継製品)を実演。関連して画像データを自動的に最適画質に修正する画像最適化ソフト「ColorFit」も出展。参考出品として地域紙向けの「パソコン版新聞組版システム(仮称)」を出展し、フルスペックの組み版機能を1台のパソコンに搭載し、コスト・パフォーマンス向上と導入移行の容易化を紹介。但し、企画検討中のため販売計画は未定。▼**NECネクサソリューションズ**：(株)ムサシのブースに印刷・出版社向け原稿作成・校正システム「Smart Source Editor」を出展し、紙・電子書籍などのマルチユース向け編集ツールを実演した。

▼**モリサワ**：「Design First」をテーマに印刷価値を高める各種ソリューションを紹介。フォントは「MORISAWA PASSPORTとUD新書体」、新製品の「組版LayoutSquare」や可変印刷ソフトのほか、eBook、インバウンド対応電子配信ツール、高品質トナーデジタル印刷機などを実演。

▼**イワタ**：ユニバーサルデザインの概念を文字設計に取り入れたコンセプトをもとに、可読性を高めた「イワタUD明朝」、「新聞紙面に配慮したイワタUD新聞書体」などイワタUDフォントのラインアップ充実化を紹介した。▼**ビジュアルプロセッシングジャパン(VPJ)**：新バージョンの印刷業界向け制作ワークフローサーバー「ターボサーバーEXPRESS」を中核に、「フルデジタル制作・製版ワークフロー」「販促支援サービス」「オンライン編集コラボレーションとクロスメディア配信サービス」「オンライン校正/承認フロー」などを実演。▼**スターティアラボ**：「店舗向けアプリ作成サービス」「カード型WEB作成システム」「電子ブック作成ツールと紙媒体と連携できるツール」を紹介。

②CTP、ワークフロー、 カラーマネジメント

▼**FFGS**：「伝統×革新」の技術融合で印刷の「未来創出」をテーマに、「ワークフロー」「デジタルプレス」「IJテクノロジー」「SUPERIA」「パッケージ」の5つのカテゴリで、最新ソリューションを出展。ワークフロー分野ではV6.5へとバージョンアップした「XMF」を軸に、MISとの連携による受注・ジョブ管理、Web to Print、カラーマネジメントなどを実現する最新ソリューションを紹介した。「SUPERIA」分野では省資源ソリューションをコンセプトに、高い耐刷性を実現した商業印刷向け完全無処理サーマルCTPプレートの新製品「SUPERIA ZD」、新聞用完全無処理サーマルCTPプレート「SUPERIA ZN」と環境対応印刷関連薬品「PRESSMAX SERIES」を紹介。▼**コダック**：UV対応完全無処理版「SONORA XJ」とエコノミーCTP「ACHIEVE」を展示、省力化・省人化と環境対応ソリューションを提案。また、オフセットとデジタルのハイブリッドワークフローへの対応やブルーフィング機能及び自動化のさらなる強化を図った「PRINERGYワークフロー8」を初公開した。

▼**日本アグファ**：国内シェアNo.1の現像レスプレート「アズーラ」を出展し、朝日新聞社、日本経済新聞社、長野日報社のプレートを展示。最新プリプレスワークフロー「Apogee Cloud」と速乾印刷で印刷現場のムダをなくすプログラム「A-SAP (Agfa System And Printing、エイザップ)」を紹介。また、クライアントのムダをなくし、印刷会社営業部門の改革を強力にサポートする新ソリューション「フレッシュプリント」の紹介と会期中に「フレッシュプリントコンソーシアム」の総会を開き、賛助会員のキヤノン、コニカミノルタ、リコーの主要デジタル印刷機メーカー3社が出席した。▼**三菱製紙**：「コンパクト&Eco もっと簡単に、もっと使いやすく～

Simple&Easy」をテーマに、CTPシステムをはじめスクリーン製版機や製本機を出展。サーマルディジプレートCTP/CTFシステムは刷版と製版フィルム兼用で、トナーもインクも使わない完全プロセスレス。消耗品は版材のみで、環境にやさしく、低ランニングコストや完全明室での取り扱い可能とメンテナンスの容易化を紹介。



活発な実演

③デジタル印刷機

▼FFGS：最新鋭トナーデジタル印刷機とWeb to Printシステム+バリアブル印刷ソフトを組み合わせ、実際の業務に即した実演を行なった。IJデジタル印刷機は高解像度連帳機や枚葉機、大判機と水性フレキシ印刷などの動画紹介とサンプルを展示。▼キャノン：「未来へつながるデジタルプリンティングイノベーション」をテーマに、「デジタルプリンティング」「ネットワークカメラ」「ワークフロー」「Web注文と印刷管理」のコーナーにより出展。連帳IJ機の導入事例として朝日新聞社と昨年11月に導入移行した東洋美術印刷の印刷サンプルを展示。トナーデジタル印刷機を使用したショートランシステムやレストランメニューの作成システムなども紹介。

▼コダック：IJデジタル印刷機「PROSPER XGV」は、従来不可能とされていた水性顔料インクを使って、軟包装パッケージへのフルカラーバリアブル印刷のサンプルを展示。連帳IJ機「PROSPER 6000Sプレス」では毎分200

メートルの高速印刷による紙器パッケージへのフルカラー印刷を動画で紹介。

▼コニカミノルタ：「共に印刷の未来を創る YOU&WE」をテーマに出展。デジタル機器の新ブランド「Accurio（アキュリオ）」のPRと新製品トナーデジタル印刷機による各種媒体対応や高い生産性、高品質を紹介。IJ「UVニスコーター」の実演とデジタル箔やニス加工のサンプル展示とB2枚葉デジタル印刷機のサンプルも展示。▼スクリーン：ワークフローではグローバルスタンダードワークフロー「EQUIOS」の新バージョンによる機能向上や効率化を紹介。また、各社のトナーデジタル印刷機との連携機能を強化し、ハイブリッドワークフローも実演。IJ連帳機では新インクによる高品質サンプルを展示。▼リコー：「千客万来」をコンセプトにトナーデジタル印刷機とサンプルを展示。主に多彩なソリューションを活かした、より効果的な販促プロモーションとして、デバ地下を想定したリアルな店舗をステージに再現した「バーチャルショップ」、最新のデジタルワークフローをベースにした「デジタルファクトリーツアー」やブランディングデザインに関するセミナーなどを織り交ぜて紹介。連帳IJ機では海外の新聞印刷サンプルを展示。▼日本HP：ブース壁面に連帳IJ機と液体トナー枚葉機の全モデル紹介。ブース内では、HPデジタル印刷機による多彩な印刷サンプルの展示と実用性をPR。合わせて「print OS」による総合管理やリモート運用管理を紹介した。

④後加工機

▼ホリゾン：小ロット生産やバリアブル生産に対応した「デジタル印刷向け製本システム」として「Smart Binding System」とデジタル印刷向け中綴じ製本システム「Smart Stitching System」のほか、最新の紙折り機、断裁機、周辺機器も合わせて実演。▼デュプロ：「受託、通販、印材ソリューション」をテーマに最新機器を多数出展した。

歳事万楽

金沢遊々

中日新聞北陸本社
技術局次長兼制作部長

石田 悦郎

北陸新幹線が金沢まで開業して、間もなく2年が過ぎようとしています。東京、大阪、名古屋から最短で2時間30分で移動できるようになり、金沢は多彩な伝統文化が身近に感じることができるようになりました。

そんな中、昨年の8月に突然北陸転勤を命ぜられました。今回、初めての日本海側の生活を経験することになりました。名古屋に比べ平均気温は1～2℃低いだけですが、冬場の日照時間は半分以下、降水量は3～6倍なので、気温以上に寒く感じるようです。しかし、頭に浮かぶのは仕事以外の事ばかりで、チャンスとばかりに、金沢に乗り込んできました。

*

金沢の住居は、通勤や買い物は全て徒歩圏内の便利なところなのですが、旧市街地は駅の反対側にあり、歩いて行くのには少し不便です。金沢市内は、観光のためのレンタサイクルが多く利用され、駐輪場や自転車走行帯が整備されているのでこの環境を利用することに。そこで急きょ学生時代以来35年ぶりに自転車に乗ることを決め、早速自転車を購入しました。しかし問題が。普段の不摂生での体重増加と筋力不足です。徐々に慣れると思いい、いざ出発です。

まずは定番の金沢城と兼六園(写真)からスタート。兼六園の手前の坂道では、押して上ることもありましたが、2時間ほどの初サイクリングは、久しぶりに良い汗をかきました。その後2～3日は筋肉痛に悩まされたことは言うまでもありませんが。お天気の良い休みの日は、近江町市場をはじめ、ひがし茶屋街に代表される金沢三茶屋街、長町武家屋敷跡、金



沢港など巡り、観光気分を味わっています。これから春に向いサイクリングにはうってつけの季節になります。四季によって景色が違うので楽しみです。

*

しかし、冬は強い季節風と雨や雪の日が多く、思うように外出できません。自転車用のスノータイヤを持っているのか、積雪の中でも自転車に乗っている人も見かけますが、到底そんなことはできないので残念です。しかし冬にはもう一つの楽しみがあります。加能ガニや寒ブリなどの海の幸が美味しくなることです。近くのスーパーの鮮魚売り場でも、名古屋とは比べ物にならないほど新鮮でお値打ちな魚たちが並んでいます。また飲食店は、香林坊から片町にかけて多くあり賑わっています。これからディープな金沢を少しずつ「発見」できるよう、走り回れればと思っています。

*

自転車ばかりでなく、金沢を起点として電車や高速バスが能登、富山、福井、飛騨などと結ばれて便利なようです。購入した折り畳み自転車を輪行袋にいれて、自転車と共に小さな旅をするのも面白いかもしれません。

*

皆さん、金沢へ来(き)まっし。

CONPT-TOURの思い出

富士薬品工業株式会社
取締役社長

名取 茂

新聞業界を取り巻く環境は大変厳しい状況が続いておりますが、弊社のモットーである“お客様に喜んで頂ける製品をお届けする”ことに日夜取り組んでおります。

さて、私がCONPTツアーに参加した回数は6回になります。最初は30年前の第12回(1987)でした。その時は61名が参加、2台のバスでの行動で、多くの大先輩と一緒することになり、後ろから付いて行くのが精一杯でした。

その後は第24回(1999)、第25回(2000)と連続して参加しました。アメリカでのNEXPO展の見学でしたので、視察した各都市ではメジャーリーグの観戦に頻繁に通いました。中でもオハイオ州クリーブランドでの観戦は、現地日本人のガイドさんからはチケットの入手は困難であるとの話を伺っていましたが、翌朝ホテルのベルボーイとの交渉で16人分を購入することが出来ました。高価なチケットでしたが、球場での指定席はセンターバックスクリーンのすぐ横。ビールやつまみを買って楽しいひと時を過ごしました。

次のサンフランシスコでは、メジャーリーグの試合はなかったのですが、添乗員さんから対岸の街オークランドでの観戦が可能との情報を得て、わざわざ列車(BART)での観戦ツアーを企画。CONPTの関係者からは“ミスター・ベースボール”と呼んで頂きました。帰国後の参加者の紀行文にはメジャーリーグ観戦の思い出が多く綴られておりました。(ファールボールをキャッチした方は、そのボールを家宝にしているとのことでした)

その後のCONPTツアーは第30回(2005)、第31回(2006)、第32回(2007)と3年連続で参加しました。この時はいずれも欧州のIFRA

展が主な視察先でしたので、欧州各地を訪問することができました。このころになるとツアーにも慣れてきましたので、主な活動はホテルでの懇親会の企画となりました。日本から持参したお酒と珍味で、初めて訪れた都市での興奮を参加者と語り合ったものでした。

ツアーの必需品―機内用のつまみ、集合写真用のカメラの三脚、爪楊枝など―も持参し、参加者の方々に喜んで頂きました。写真は第31回ツアーで、アムステルダムホテル前で記念撮影したものです。



CONPTツアーは毎回、会の名前を決め、帰国後も毎年再会パーティを行っておりました。第24回(1999)がつくも(九十九)会、第25回(2000)がミレニ会、第30回(2005)がリゾート会、第31回(2006)が与一会そして第32回(2007)がB.B会です。

毎年の都内(主に六本木)での再会パーティ参加者の集合写真を年賀葉書でお送りしている時もありました。

このようにCONPTツアーでは、多くの方々とその後もお会いすることが出来、営業活動の面でも多くの諸先輩と気軽に話をさせて頂く機会に恵まれました。若い方々との出会いにも多くの刺激を受けました。私にとってツアーに参加した方々との出会いは貴重な財産であります。今後も新聞業界の発展に微力ながらお手伝いできればと考えております。

わが職場

高知新聞まほろばセンター

(株)高知新聞総合印刷 新聞印刷本部長兼印刷部長 山崎 昌彦

2012年9月に稼働を始めた「高知新聞まほろばセンター」も5年目に入った。幸いにも、これまでの間に大きなトラブルは無く、今日まで順調に稼働してきた。現在の、輪転機を主とした新聞製作設備の完成度の高さには、本当に驚くばかりである。(実は旧工場では色々と、相当苦労をしました)見回せば4×1輪転機仲間もいつの間にか増えてきており、貴重な情報を頂くことも多く、大変心強く思っている。

当センターでは広く一般見学者を受け入れており、昨年は約2,900人が見学に来場した。大半は小中学生の見学だが、天気の良い日には敷地内の芝生で小学生がお弁当を広げる姿も見られ、微笑ましい。その高知新聞まほろばセンター3階のウッドデッキから、高知県民の森、工石山(1176m)を望むことができる。昭和42年、全国に先駆けて「自然休養林」に指定されており、樹齢200年を超える天然ヒノキや、モミ、ツガ、アカガシなどの大木が見られる。白く輝く巨石が特徴的で、GPSの無い時代には漁師が「山立て」の目印にしていたとのこと。登山道は良く整備されており安全、休日には子供から年配者まで多くのハイカーで賑わう。特に4月のミツバツツジとアケボノツツジ、5月のシャクナゲは艶やかで見応え十分。花の多い山として有名である。また、高知市の水瓶の一つ、鏡川の源流点があり、イシツチサンショウウオも生息しているという、自然が溢れる別天地なのである。

工場5周年

(株)トッパンメディアプリンテック関西(朝日新聞大阪工場) 統括部長補佐 水黒 順二

大阪工場が発足して丸4年を過ぎ、早いもので6月には5周年となる。朝日プリンテックの大阪管内旧3工場(中之島・堺・丸亀)がその役割を終えた後、大阪梅田の西、淀川沿いの海老江に朝日新聞の印刷基幹工場として2012年の秋スタートした。凸版印刷としては関西での創業の地でありグループ会社を含む総合ビルに生れ変わった建屋の中にある。生産設備の多くは、トリコロールと呼ばれる赤・白・青の3色のイメージカラーで統一されている。工場西側からは淀川越えに六甲山系が広く眺められる見晴しのいいロケーションである。

当初、関連3社(凸版・朝日・朝日プリンテック)から出向した社員でスタート、安定化に向けた第一段階が終了した2014年1月から凸版系印刷工場社員の大阪工場への異動を開始、将来的には工場運営を委ねるべく、要員の入替えと人材育成に力を注いでいる。

日常的に朝日新聞・日刊スポーツをはじめとして業界各紙、各種別刷も数多く印刷しており、工程は媒体切替時間も含めて相当な密度で、紙上げ回数も多い。研修生もその生きた工程の中、悪戦苦闘している。商業印刷の長時間連続印刷とは違いここでの工程は分刻みで、納期についてもトラックの社発単位だから観念が違う。「昔の工程はもっとのんびりしていたよ。」と話をすると、どうも説得力を欠く。固定観念の無い新鮮な風が静かに今吹こうとしている。業種の壁を乗り越え研修を終了、本番を迎えたメンバーも相当数増えてきた。頼もしさ力強さも感じられるこの2017年、さらに輝きを増す充実した5周年としたい。

新入会のことば

《(株)システマック 代表取締役 風間 大介》

この度、日本新聞製作技術懇話会への入会をご承認いただき、大変ありがとうございます。

同会の一員となれましたこと、大変光栄に感じています。

入会に当たり、上坂会長をはじめとされます同会の関係者の皆様、事務局の皆様、そして同会にご推薦いただきました三菱重工印刷紙工機械株式会社、三菱製紙株式会社にはこの場をお借りしてお礼申し上げます。

弊社は、1980年の創業以来、社名が示しますとおり、システム(SYSTEM)と機械(MACHine)の結合(=SYSTEMAC)をコンセプトに、事業を行っております。

1985年には、APR(感光性樹脂)刷版に版情報を印刷するシステムを京都新聞社と共同開発させていただいたことをきっかけに、新聞印刷関係の業界に携わらせていただくようになり、以後、主に新聞発送に関連する業務を支援する装置やシステムを開発しております。

1998年からは、新聞発送システムのノウハウを活かして、折込チラシの仕分・配送システムも手掛けております。

当時は、まだ少なかったPCを採用した新聞発送システムを開発し、現在では、スマートフォン、タブレットなど新しい技術を積極的に活用した新風を吹かせるシステムづくりを行っています。

我々は、お客様のニーズをカタチにし、それを一緒に育てていけるシステムづくりをしていきたいと考えています。

今後、業界の一助となるシステムづくりをモットーに邁進する所存でございますので、皆様のご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

第42回年末全体会議開く

日本新聞製作技術懇話会(CONPT)は第42回年末全体会議を12月14日午後、日本プレスセンター内で開いた。日本新聞協会から来賓の3氏を迎え、会員社32社43名が参加した。各委員会が平成28年度の活動中間報告を行った後、29年度の事業計画案、林克美企画委員長のCONPT副会長就任など4議案が承認された。

冒頭の挨拶で上坂義明会長は、新聞各社との技術対話などCONPTの活動を紹介、「会員社は製作部門だけでなく、新聞社の局を超えた協力が可能だ。新聞界の発展のためにCONPTは行動を起こす」と語った。

来賓の古本朗日本新聞協会技術委員会委員長は「新聞界の厳しい環境の中、技術革新、効率化など、CONPTとの連携を大切にしたい」と挨拶。神田俊英・同編集制作部長も「今年は2018年の次回JANPSへ向け、連携を密にして活気ある展示会にしたい」と語った。

大会議長に上坂会長を選出して審議に入り、評議員会(藤間修一副会長)、クラブ委員会(平井泰之委員長)、企画委員会(林克美委員長)、広報委員会(桑江暢也委員長)が、それぞれ平成28年度の活動の中間報告、続いて事務局が28年度事業・会計の中間報告を行った。

また席上、(株)インテックの新担当者、松尾修氏、1月からCONPTに入会する(株)システマックの風間大介社長が紹介された。

◇承認された4議案は以下の通り。

- ①CONPT副会長に林克美企画委員長
- ②手打省一広報副委員長の評議員重任
- ③CONPT入会企業勧誘のための入会金半額特例の延長(会則変更)
- ④平成29年度事業計画案
 - ・ CONPT-TOUR2017を派遣
 - ・ 次回JANPSへ向けて活動

- ・新聞社との技術対話を推進
- ・技術懇談会を2回開催
- ・CONPT技術研究会 5月に開催
- ・会報「CONPT」発行

第35回新聞製作人 新年合同名刺交換会開く

日本新聞協会と日本新聞製作技術懇話会(CONPT)の共催による第35回新聞製作人新年合同名刺交換会が1月11日(水)午後3時30分から、日本プレスセンター10階大ホールで開かれた。新聞社関係65社134人、会員社42社201人に新聞協会、CONPT事務局を含め342人とほぼ前年並みの参加者だった。

冒頭の挨拶に立った古本朗日本新聞協会技術委員会委員長(読売新聞)は「新聞界を取り巻く状況は厳しいが、製作部門の技術革新には食欲に取り組んでいかなければいけない」として、「英国のEU離脱や米国のトランプ新政権の発足など、世界史変動の契機ともなりえて、漠たる不安もあるが、こういう状況だからこそ、質の高い情報と分析を提供する能力を持つ新聞の役割は重要だ。メーカーの支援を受け技術面から新聞を支えていきたい」と語った。

上坂義明CONPT会長は、新年から会員社が1社増え44社になったことを報告し、「CONPTは一層パワーアップして新聞業界の発展のために活動していく。メーカーは変化への対応が試される時だ。われわれも行動を起こしている」と挨拶。昨年9月にスタートした新聞社との技術対話など新しい活動を紹介、「CONPTのパワーをお見せしたい」として会員社を壇上に招き、「新聞社の皆様と技術情報を交換して、新しい開発テーマを見出したい。会員社は製作部門だけではなく、幅広い分野で新聞界に貢献することができる。CONPTは技術協力の団体だ」と強調した(写

真)。

続いて広瀬昇技術委員会副委員長(東奥日報)が乾杯の発声、「今年を飛躍の年にしたい」との決意を受けて歓談に入った。中締めは林克美CONPT副会長が務め、三三七拍子とともに午後5時過ぎにお開きとなった。



会員社の代表を壇上に招いてCONPTの
パワーを強調する上坂会長



上坂義明CONPT会長は、新聞製作人新年合同名刺交換会に先立って開かれた日本新聞協会技術委員会で、議事終了後に時間をいただいて、新聞社との技術対話を中心としたCONPTの昨年の活動を報告した。

上坂会長は「9月に全九州新聞社制作・印刷担当局長会議、11月には北海道印刷5社会に参加することができ、様々なお話を聞かせていただいた。対話活動の成果が出せるよう検討を進める。今年も活発に活動したい」と説明、CONPTの活動への理解と協力を要請した。

お知らせ

第6回CONPT技術研究会を5月19日(金)午前11時から、日本新聞協会・7階大会議室(日本プレスセンタービル)にて開催いたします。

今回の題目は「フォントの新しい流れとその周辺」、講師社は、株式会社イワタです。

多くの方のご参加をお待ちしております。

(事務局)